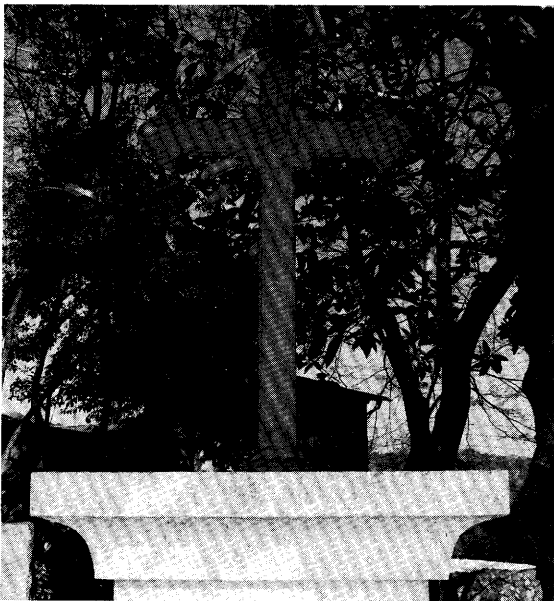


郷土あかし

郷土館だより
第42号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069

内山安兵衛家と八代目末太郎



八代目安兵衛末太郎夫妻の墓

はじめに

明治期の全国長者番付表を見たことがある。三井・岩崎・鴻池等を横綱、大関クラスとし、幕下に小さな活字で五日市の内山安兵衛がのっていた。氷川の木村源兵衛などと並んでいたのを覚えている。いずれ寄付ねだりのいかがわしい印刷物であったかと思うが、全国で総勢3、4百名程だったと記憶している。

内山安兵衛は江戸から近代（明治・大正・昭和初期）にかけ、現在の西東京バス車庫一帯を屋敷地とした名望資産家であった。家業は質屋を業とし、秋川上流域（桧原村を中心とする）大山持であった。町内に同族が二家あり、いずれも有力者で、仲町（大井屋・宮田木工所の

位置、後駅前転居）の上内山家、下町（秋川書房とその東隣）の向内山家である。本家の安兵衛家は両家と区別し大内山と呼ばれた。内山家とともに五日市を代表する名門旧家に五日市村の名主土屋家があるが、ここも上（あさひ銀行五日市支店）下（栗原医院と栗原呉服店）大番場（新五日市警察署）三家からなり、互に深い血縁関係を保っていた。内山家も二代にわたって向内山家より入り婿をしている。幕末に活躍した七代目安兵衛はその一人である（向内山家伝承）。

今、江戸期はもとより近代の五日市事情を知る人も少なくなった。明治大正期に活躍した安兵衛（幼名末太郎）は家系表によると八代目に当り、クリスチャンで代議士、五日市鉄道社長など多彩な関歴の持主である。彼の長男善一は襲名しなかったので、末太郎が最後の安兵衛である。この八代目について筆者（石井）の知り得た知識は必ずしも充分とはいえないが、それでも今書き残しておかないと埋れたままになる恐れもある。あえて小論をしたためた。（文中敬称略）

1. 内山家の家系と家業

内山家の資料は五日市町の旧邸内の蔵に多少あったようであるが、筆者は接する機会を得ていない。吉田聰氏の『内山安兵衛』という論考はその資料に基づいて書かれているので引用させていただくと、先ず家系について、

初代 安兵衛	延享2年	1745	没
二代 英棟テルタカ	寛政元年	1789	没
三代 英秀テルヒデ	享保20年	1735	没
四代 英智テルチカ	天保13年	1842	没
五代 英育テルヤス	安政4年	1857	没
六代 英昌テルマサ	安政5年	1858	没

七代 英招テルアキ 明治33年 1900 没

八代 末太郎 昭和11年 1936 没

とある。内山家資料には遠い祖先は内山信濃守といい、その子孫が敗戦によって土着した家としている。歴代の諱を英で統一しているところなど、いかにも武士の系譜をひく家らしい。ところで、この表の初代安兵衛は江戸中期の人で、武士系帰農者（おそらく中世末か江戸初期の人物）との間のつながりがハッキリしない。資料によると「五口市ニ入りシ当時本姓（内山）ヲハバカリ、萩原（萩原の間違いと考えられる）ノ姓ヲ用ヒシトイフ。当主ハ代々安兵衛ヲ通称トシ善右衛門ヲ隱居名トシ来レリ」とある。この表の初代安兵衛は内山姓にもどった初代とも考えられるが、「五口市ニ入りシ当時」が依然として不明確である。従って五口市の表通りの商人として生え抜きの家か、中途よりの参入者かの問題は未解決である。

なおこの家系表の三代英秀の没年は前後と矛盾する。資料の間違いであろう。（吉田氏論文、『多摩文化』18号）

吉田論文は四代英智が五口市産の黒八丈を京都で高い産をなしたとしている。黒八丈は文化文政頃から当地の特産織物として生産を伸ばし、天保期には販路も各地に拡大した。英智の話は辻褄が合っている。通常八王子の間屋経由で販売されるものを、五口市から直売すればそれだけ利は上る。しかしこの件は資産を築く契機の一つになったと見た方がよさそうである。内山家の財は長年の金貸し業によるもので、質にとったり、購入したりした山林を育成して得た収益が中心で、それに加え集積した田畑からの小作料、貸付金利息によるものであることは地元の文書資料より窺える。四代英智が活躍し資産家としての基礎を築いたことは事実であろう。

大悲願寺住職慈明の日記（寛政・享和・文化）をみると、しばしば内山安兵衛、及び善右衛門から金を借りているが、年代をつきあわせると四代英智の頃である。内山家は当時よりこの地域の銀行に相当する役を演じていた。内山家は質屋といっても元質屋と呼ばれる質屋で、群小質屋に資金を提供したり、村の共有林を担保に年貢の立替払いなどを行っている。なお吉田論文には四代英智の後継者がなく、向内山より養子をとったと書かれている。向内山家のいい伝えと家系表を照合すると、六代英昌は夭折しているの、五代英育、七代英招が向内山より本家に入り婿したようである。

五代英育は五口市村御料分（五口市は文政11年から旗本中山氏と御料（代官領）の2給地になる）の名主を勤めていたが、折から甲州道中小仏・駒木野両宿の伝馬の

助郷役が課せられ、この免除運動の為に贈賄の罪に問われ入牢している。彼が放免されたときは村人が歓呼して出迎えたという話が残っている。

七代英招は代官江川太郎左衛門に請われてしばしば献金しているが、文久3年農兵隊創設費に3百両を挙出している。これは五口市組合18か村が負担する額の半分で、以後、寄付行為の際は内山家が先ず半額をもち、残り半額を皆で分担する慣習めいたものが出来たという。幕末期、内山家（七代目のみではない）が支出した各種の献金額の合計は筆者の計算によれば2千両をこえる。その他に江川家の武道場（？）の建築用材に一山献上する件など含めるとその富豪ぶりがうかがえる。内山家の献金の内幕をあかせば、幕末期の騒然とした世情がある。富農層の恐れは窮民層の暴発行為（打こわし等）で、治安の維持はやはり幕府権力に頼るより致し方ないというのが富農層の判断であった。内山家も献金は自己保全の必要経費と見なしていたようである。果して慶応2年6月武州一揆と呼ばれる大規模な打こわし騒動が起り、同月15日青梅を打こわした一隊が梅方峠をこえ、17日未明五口市村を襲った。英招は農兵隊を手配するとともに松原村へ呼びかけ、鉄砲獵師を呼び集めた。五口市側の準備体制がよく、一揆側は死体や多数の生捕人を残して退散した。この時の英招の活躍は目覚ましかった。彼には前年長男末太郎が生まれている。守るべき家族、家産の為に張り切らざるを得なかったものだろう。彼は事後処理費として4百両を投じ、応援にかけつけた松原村はじめ近隣村々に報いている。内山家は世情に敏感で、常日頃から何かといえは餅をついて近所に配ったり、誰でも取ってよい野菜畑を作ったりした話が残っている。又邸内に武道場を設け、天然理心流の師範を招いて近隣の若者に指南させた。幕末期は百姓剣法が流行し、若者達は武道修業を好んだという。これも一つの自己解放現象だろう。内山家は彼らの為に資を投じた。これはそのまま用心棒の養成にもつながる一。

2. 末太郎と権八

明治17年、末太郎は私淑している深沢村の旧名主家で、山持資産家の若きエリート深沢権八に誘われ熱海へ清遊に赴いた。この時末太郎（慶応元年生）は19才、権八（文久元年生）は23才。権八の書き残した旅日記によると、雨中人力車をつらね、泥濘の中を旅館につく。権八は三味線の音にさざめく酔客の様子をききとがめ、いかにも軽侮した調子で書き留めている。二人の若き貴公子のヒュー

マン坊ちゃんぶりが目に浮ぶ熱海行であった。明治17年といえば、世の中は不景気風がふきすさび、困民党・秩父事件など借金まみれの民衆の騒擾^{じょう}事件が頻発した時期である。皮肉なことに人件費の暴落したデフレ期ほど山の手入費が安上りとなり、大山持には好都合なのだ。しかし権八、末太郎ともしっかり者の父親が家業を取りしきっており、デフレの家産に及ぼす機微についてなど関心を払う必要のない二人だった。

権八は気鋭の秀才で、翌18年には北多摩郡の民権家吉野泰三と組み五日市を中心とする民権家連で、国会開設期限短縮建白書を元老院へ提出している。その筆頭発起人が最も年の若い23才9か月の権八である。この時期の末太郎は権八に兄事するというより腰巾着のようについて廻ったようである。

『三多摩政戦史料』渡辺欽城著という大正13年発行の本がある。史料として正確さを欠くという評があるものだが、そこに明治15年自由党総理板垣退助が岐阜遊説中、凶漢に刺され、東京にもどって療養中、内山安兵衛、深沢権八らが見舞った記事がある。当時17才の末太郎はたまたま東京遊学中（中村正直の同人社に学ぶ一吉田論文）で、深沢権八、田島春太郎に連絡し、ともに見舞に参上したところ、臥床中の板垣は欣然と面会に応じ、若者達を逆に激励したとある。後明治17年8月板垣退助一行が五日市に来遊、三人曳きの人力車を駈って深沢家を尋ねた話が残っているが、遭難見舞の縁が板垣を深沢の山奥まで誘ったものであろう。深沢権八は明治21年神奈川県会議員となり、同23年12月死去すると、内山末太郎はその後を襲って同25年県会議員になった。しかし彼は翌26年議員をやめている。

若い末太郎が民権運動に心を動かしたのは時代の風潮とともに、敬慕した権八の影響によるもののように思える。兩人とも育ちのよさを反映し、壮土風の攻撃的なタイプとは対極的な人柄である。権八の方が気鋭で多才なのに対し、末太郎は穏和で人に押されて動くおっとり型のところがある。権八の死後末太郎は当然のようにその後継者と目され、地域のプリンスとして周囲から擁立されることが多かった。しかし彼は本質的に政治向きの人間ではなさそうである。『三多摩政戦史料』には末太郎がいかにも政治好きの活動家の如く描かれ、内山家が自由民権運動家の梁山泊（豪傑、野心家の集合所）で大阪事件のシンパであったように書かれているが、信のおける記事ではない。もちろん内山家は客の出入りの多い家で七代英招は度量の広い人物であったらしい。末太郎も人

に差別を設けることなくつきあい、社会活動に深い関心をよせていた。彼が八王子在住の解放運動の闘士山上卓樹に惹かれ、交りをもつようになったのは、彼のヒューマンな性格のあらわれで、彼をしてキリスト教へ赴かせた誘因となった。

3. 末太郎とキリスト教

明治10年、八王子に入ったフランス人のカトリック宣教師テスト・ヴィドは下一分方村に建った聖マリア教会を根拠に多摩の各地を精力的に布教して廻った。彼は明治21年五日市の名望資産家内山安兵衛を信者にしたと報じている。末太郎はこの時24歳。彼はかねて観音を信仰していたが、マリア像に観音の面影をみてキリスト教に関心をよせ、これが入信の契機となったという。又テスト・ヴィドは聖マリア教会の創設者山上卓樹が末太郎と親交のあるのに着目、卓樹をして入信を誘わせている（吉田論文）。末太郎は21年8月内山邸の崖下の秋川の淵で洗礼をうけ内山ボーロとなった。以来土地の人はこの淵を耶蘇淵と呼んだ。内山家の御曹司がヤソになったという驚きが命名の根拠であろう。末太郎は早速フランスからブロンズの十字架をとりよせ、秋川を望む崖上の一角に立て自分の墓とした。これも亦郷土の人士を驚かせた。私は末太郎が青春の血を湧かせた民権運動を深沢権八と共通した文化運動と見ている。封建の因襲をとりさり地域の旧弊を捨て、自由と平等の社会の実現を目指す啓蒙運動としての民権主張で、政権争奪を目標とする闘争型の壮士派民権とは一線を画す、というのが私の判断である。文化活動としての民権主張はキリスト教と共通項が多い。

末太郎のキリスト教信仰は洗礼後、時をふるに従って深まっていったように思われる。彼の穏和である反面、芯の強い性格が、神をもつ生き方にピタリとはまったからではあるまいか。彼の信仰は彼の甲冑となった。それと同時に五日市の人士との間に違和感を増した。明治30年代、彼が五日市を去って、しばしば逗子の別荘にこもったのはその為であろう。そしてそれを決定的にしたのは父英招^{テラフキ}の死である。明治33年9月に没した七代目安兵衛の葬儀を末太郎はキリスト教で営みたかったが、英招は洗礼をうけていない。結局内山家が檀家総代であった菩提寺広徳寺で仏式葬儀を営んだが、この際安兵衛は広徳寺側と意見が合わず、父の葬儀に欠席している（吉田論文）。喪主なき葬儀は又も土地の人々を驚かせたであろう。末太郎は自分の邸内に五日市カトリック教会をつくり、

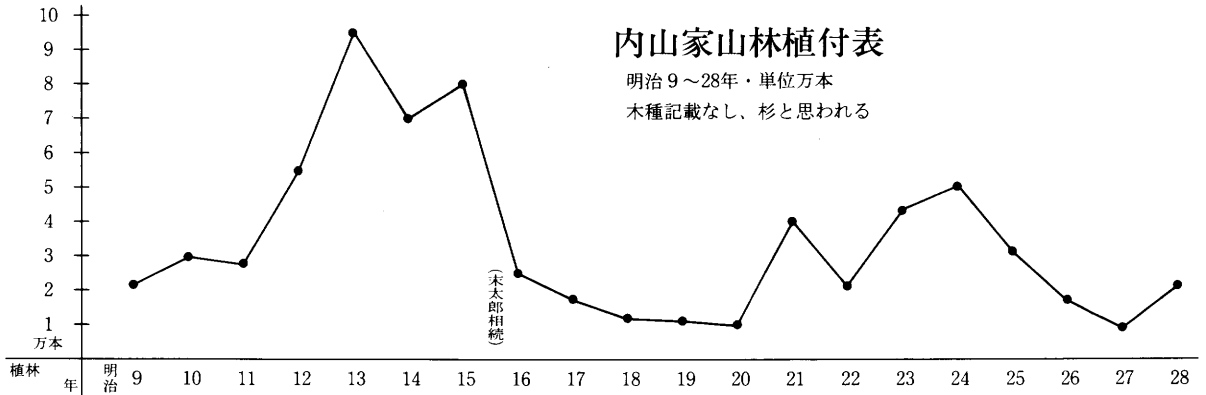
家族と差配人を信者にしたが、逗子隠棲後は専ら鎌倉教会に通った。

4. 末太郎と家産

吉田論文に内山家山林植付表が掲載されている。これで見ると明治9年から明治28年迄、五日市・乙津・養沢・桧原4地区に分け毎年の新規植付本数と補植本数が出ている。これをグラフ化したのが下表である。これによると年平均3万5千本を新規に植付けているが、通常1町歩 (ha) 3千本といわれるので、10町歩を超える植付面積である。林業家は30年サイクルで計画を立てるから、



西東京バスの車庫に変わった旧内山邸



内山家山林植付表

明治9～28年・単位万本
木種記載なし、杉と思われる

20か年合計 709,207本 (年平均 35,460本)
他に補植20年間計 228,944本 (年平均 11,447本)

内山家の持山は3百町歩をこえることになる。

この表は末太郎の代になってややテンポが落ちているが、それでも現状維持は保っているようにみえる。問題は父英招の死後、彼が逗子に隠棲してからである。内山家には三人の山庄屋 (山林の管理人) がいて、山を廻っていた。彼らの出勤簿は筆の軸の尻で〇印つける。一年合計してみると365を超えていたが、内山家では黙って給金を払っていたという。末太郎は家産に執着がなく、むしろ心の重荷にしていた風が感じられる。明治29年、土屋常七の提称で五日市銀行が設立されたとき、末太郎は副頭取にされ、内山家の質屋の店舗がそのまま銀行となった。末太郎は父の死後銀行の役職をしりぞき、店舗を閉じた。五日市銀行は土屋常七家の前へ移った。長年親交のあった常七との間柄を考えると、彼の隠棲への意志の強さと、金貸し業をさけるキリスト教信仰のなみなみでない深さを感じさせた。

大正9年、衆議院議員選挙に末太郎を推す声がおきた。これは当時府会議員だった岸忠左衛門らが計画していた五日市鉄道の社長に末太郎を推す前提としての出馬要請

だった。逗子暮らしの身についた末太郎にとって迷惑な話であったが、郷土の意志を結集する旗印にという岸らの懇請には弱かった。内山安兵衛の名と金を郷土が必要とするならご利用下さいというのが末太郎の心境だろう。彼は予定通り擁立され代議士となり、五日市鉄道社長に就任した。社長の持株一千株 (五万円) は大正の不況期 (この時五日市銀行は破産し上・下土屋家は一切を失った。) にあっては、大内山といえど容易ではない。しかも五日市鉄道は赤字会社で、設立後も内山・小机・池谷の三山持重役保証の借入金で運営していた。

末太郎の代に内山家はその膨大な資産の大方を失った。ある人は選挙だといひ、ある人は大正末期の不況というが、一番大きな原因は彼が資産の管理を放棄して隠棲したことにあるのだろう。末太郎は衆議院議員も一期、鉄道会社の社長も短期で切上げ、逗子にこもり昭和11年9月ここで永眠した。彼の死後、残ったものは崖上十字の墓標と家族のキリスト教信仰だった。次男良の長女孝子はシスターとして聖心女子大学学長となり、退職後平成5年11月祖父のもとへ旅立った。(文責・石井道郎)